一七

浪漫派の政治家

ヨゼフ・ギョルレス　フリードリッヒ・フォン・ゲンツ　ジョセフ・ド・メートル

ギョルレスは彼の「基督教的神秘説」(第二卷三九頁)に於いて、新生に依つて一層高き調和に達したる肉體の、最も注意すべき特徴の一つは、それより發散する香氣であると言つてゐる。「即ち病的なる、而して不調和なる有機的生活の表徴が、惡臭であるやうに、それから發散する芳香に依つて、その內的調和は表示せられる。かくして、神聖の香氣を發する(im Geruche der Heiligkeit stehen)といふ表現は、單に譬喩的のものではなくして、神聖なる生活を營む人々から、芳香が發散するといふ、無數の確實なる經驗から割り出されたものである。」而して彼は、數知れぬ歷史上の實例を引證してゐる。

ギョルレスの言にして正しいならば、——予は彼の言ふ所を少しも疑はうとはし

ない——予が結末に於いて論述せむとする人物は、非常に芳烈なる香氣を發散したに違ひない。何者、それらの人物は、彼及び教會の、充分なる滿足を購ひ得る人達だからである。予は、浪漫派の集團の畫圖を完成せむがために、同派の主義を實人生及び政治に移入せしめたる人々に就いて、論述しようと思ふ。予はこの派の教會主義の代表者として、ギョルレス自身を、一般政治家の中にても最も興趣に富める人物として、同派の政治家フリードリッヒ・フォン・ゲンツを選出する。

ヨゼフ・ギョルレス(Joseph Görres)は、一七七六年にライン河のほとりに生れた。彼は小學校時代はクレメンス・ブレンタノーと同級であつた。佛蘭西の軍隊が獨逸に氾濫した時に於いては、彼は革命の渦中に捲き込まれた。未だ大學へ入學しない少し前に、彼は彼の生れた都なるコブレンツに於ける、ヤコビン黨の一員として、自由思想の普及に努め、かつ„Das rothe Blatt"(「赤色新聞」)といふ、獨逸の自由主義者の機關新聞を發刊した。彼には、過去の時代は嫌惡すべきものとして、佛蘭西は聖地として、それ以外の國々は奴隷の國として見えた。

一七九八年に於いて、佛蘭西軍が羅馬に侵入した時に、ギョルレスは同市の沒落と

法王權の滅亡とに就いて、聲高く歡呼した。軍隊侵入の一週間後に、彼は「赤色新聞」に恁う書いてゐる、「吾人は僧徒の假面を剝ぎ取り、而して健全なる思想を到る處に流布せしめようと思ふ。吾人もまた、僧侶輩に永久の嫌惡を誓ひ、偏へに民福の增進に努めてゐる。また吾人は王侯のためにも努力しようと思ふ、即ち彼等の無用なることを證明し、政治の心配から彼等を脫却せしめることに依つて。」

彼の文章は、青年らしい覇氣と機智とに富んでゐる、正に民黨首領及び新聞記者の文章である。然し彼の譏刺の中には、完全なる變改に對する可能性を持つた、ある狂熱が存在する。ラスタット(Rastatt)の會議に於ける談判が、三人の僧侶の選帝侯と、僧正小僧正等との撤回を出來さうになした時に、ギ゠ルレスは彼の機關新聞に於いて「賣りもの(„was zu verkaufen")の表題の下に、次のごとき品物を書き並べた、「皇子及び內親王に對する最上の花束を提供すべき、自由といふ木の種子の一船荷。……斬つたり、射擊したり、刺したりすることの出來る、善く訓練せられたる、人間といふ家畜の一萬二千頭。彼等は、主君のためには、些の不平なしに自己を銃殺せしめるほど、鞭や棍棒を以て十二年も、訓練されてゐる。……善く鞣された水牛の

革で出來た、三つの選帝侯の帽子。それに屬せる牧標(グルムシダーブ)は、內側は鉛で、外側は蛇を以て飾られ、中に劍が仕込んである。その上に附いてる神の眼は、盲目である。」

佛蘭西人が一七九七年に、再度マインツを占領し、而してその報知がコブレンツに達した時に、ギ゠ルレスは羅馬的獨逸帝國の崩潰に對する、狂熱的なる凱歌を歌つた、「一七九七年十一月三十日、即ちマインツの橫斷の日に於いて、午後の三時に、不快なる記念を有せる神聖羅馬帝國は、レーゲンスブルグで、九五五年五ヶ月二八日の高齡に於いて、全身の衰弱に加へられた卒中の後に、從容として、總ての聖餐に取り圍まれて、死んで了つた。……故人は、八四二年(八四三年)の六月にヴェルドゥンで生れた。彼が生れた時に、天頂に於いて不幸を豫示せる彗星(Perrückenkomet)が燃えてゐた。その子供はカルル・デル・アインフェルティーゲ、ルードヰッヒ・デル・キンド及び彼等の繼承者の宮廷に於いて敎育せられた。……」——ギ゠ルレスは此處に、ビ゠ルネ(Börne)がその後、「巴里からの書翰」に於いて響かしたと、同じ調子を出した。

ギ゠ルレスは、佛蘭西の共和政體を、ラインの左岸地方の相續者に、ボナパルト將軍閣下を遺言執行者に、定めたる、故人の遺言狀を、輕蔑の念を以て讀んだ。

これがギョルレスの暴風の如き青年時代であつた。然し已に一八〇〇年に、彼は積極政策から手を引いた、――巴里に於ける短き滯在が、佛人に對する彼の同情から彼を癒したので。それでも彼は尙、熱心なる進步主義の人であつた。その結果として抑壓的なる專制政治を齎すに違ひない、過去の復歸が、彼に取つて最も恐るべきものであつた。然るに外國の支配の壓迫が、彼の愛國心を喚起するに至つた。ハイデルベルグの大學に於いて研學せる頃に、彼は彼の浪漫的時代に入り込んだ。彼は詩及び哲學の本質に關する講演をなし、「ニーベルンゲンリード」に對して熱注し始め、古獨逸の歷史詩及び傳說を研究し出した。此處で彼は再び、小學時代の友クンレメンス・ブレンタノーに出會ひ、アルニムと交り、而してシュレーゲル兄弟及びグリンムと接觸するに至つた。彼は「兒童神話」(„Kindermythen“)「獨逸國民讀本」(„Die deutschen Volksbücher“)及び「古獨逸民謠及び平民歌集」(„Altdeutsche Volks-und Meisterlieder“)を出版した。

浪漫派の運動がギョルレスの心に燃し立てたものは、愛國心のみではなく、彼はこれまで餘り注意せられなかつた波斯語を研究し始め、殆ど何等の輔助手段なしに、

フィルドゥス(Firdus, od. Firdusi)の史詩を巧妙なる散文に翻譯する事が出來た。

一八一八年に於いて彼は、コブレンツ市の代議士として、伯林へ赴いた。彼は大膽にも、獨立戰爭の時代に約束せられたる、ある憲法の發布をば、王に要求した。この企圖は、凌辱と數年の追放とを以て報ひられた。

一八二四年までは、ギョルレスは、主として浪漫的なる獨逸の愛國家として止まつた。この年から彼の死(一八四八年)に至るまでは、彼は尊僧的反動の代表者である。彼の「獨逸及び革命」(一八二〇年)に於いて、加特力教に對する傾向は、已に顯著である。彼はこの書に於いて、宗教改革をば「第二の人類の墮落」と呼んでゐる。歷史家としては彼は、中世の研究に沒頭した、而して今や教政をば、王政の專橫に對して國民の自由を保護すべき、唯一の力として、崇拜し始めた。嚮て彼は、ブレンタノー及びフランツ・バアデル(Franz Baader)の感化の下に、宗教上の幻視の信仰者となり、全く迷信的となつた。クレメンス・ブレンタノーは丁度當時、昔のアポロニウス・フォン・テュアナ Apollonius von Tyana(新ピタゴラス派の哲學者。譯者。)のごとく、接神術に惑溺してゐたある家族に、力强い印象を與へつゝあつた。丁度その頃フォン・クリューデネル夫人(Emu von Krüdener, 一七六六―一八二四。譯者。)が、神聖同盟を創設したの

である。

已に一八二六年に於いてジョセフ・ド・メートルが、ギョルレスを「ば、その著「加特力教的の瑞西に於ける、國家の威力と教會の自由との闘爭」の爲に、天才と公正とを以て、かつ未だ嘗て見られなかつた程の大膽と激烈さとを以て、教會を辯護せる戰士だと言つてゐる。かゝる人のかゝる讃辭は、輕視すべからざるものであると共に、吾人が、獨逸の浪漫主義が佛蘭西的の普汎的反動に移り行く、境界線の上に立つてゐる事を示してゐる。一八二七年にギョルレスは、彼の「神秘說」の前驅として興味ある著書「エマヌエル・スヴェーデンボルグ、彼の幻視及び教會に對する彼の關係」を出した。

ブレンタノーが一八三三年にミュンヒェンに行つた時に、彼は尙同市に滯在してゐた舊友ギョルレスと會つた。ブレンタノーのギョルレスに對する感化は、決して小なる者ではなかつた。前者は今や全く迷信に沒頭した、而してシェリングの新しき天啓哲學すら、彼には充分敬虔的とは思へなかつた。年若き神學者達が嘗て、その哲學に就いて論じ合つた時に、ブレンタノーは恁う叫んだ、「諸君の賞讃は何うも行き過ぎてゐるやうだ。私には一滴の聖水の方が、シェリングの全哲學よりもずッと有り

難い。」彼はカタリーナ・エムメーリッヒの幻視に關する彼の備忘錄を、悉くミュンヒェンの方へ齎らした。彼は最早、福音書を必要としなかつた。基督の言說及び旅行に就いては彼は、この幻視者によつて、聖書によつてよりも、より多くを學んだ。この聖なる女は、バレスチーナの地圖をすら、彼に啓示した。ギョルレスは間もなく、ブレンタノーのやうに奇蹟及び神話の熱心なる信者となつた、而して一八三六年から一八四二年の間に、獨逸浪漫派に依つて生み出された最も狂的なる書、「神秘說」四卷を書いた。

ギョルレスが巫術及び魔法の深秘に、深く突き入れば突き入るほど、彼自身は愈〻奇怪なる人物となつた。彼は、自分は惡魔に憑り附かれたものと信じてゐた。例へば彼は嘗て、自己に交涉せられる事を忍び得ざる惡魔が、彼よりある草稿——それは後に彼の本箱にあつた——を盜んだといふ事を嘆じた。

宗教上の爭論がキョルンに於いて破裂した時に、ギョルレスは、法王黨の辯護者として、普魯西の政府に反對した。新教に對する彼の熱烈なる駁論は、聖書風の表現を以てなされた。彼の論敵は——彼の言に從へば——毒蛇の種屬であり、普魯西の

國家は惡靈に憑かれてゐるやうであつた。彼はこの惡靈をば「靈と稱するに足らざる」骸骨である、即ちそは、吾等の先祖の時代に於いて、普魯西の軍隊で「一時に七人の背を打つ」鞭を振つた奴であると言つてゐる。

この抗論は、佛蘭西の加特力教徒の首領、モンタラムベール(Montalembert)伯の嘆美を惹き起した。獨逸の加特力教的地方に於いては、彼は、教父の如く尊敬せられ、「加特力教のルーテル」と稱せられた。バイエルンの政府を運動の渦中に捲き込むことが、彼に成功した。同政府は、新教的の普魯西の政府の反對者の爲に、出版の自由を與へた。而してギュルレスは、バイエルンが加特力教的の強國として、同教の爲に氣を吐かむことを、希望してゐたのである。

政治的宗教的狂熱のいかなる勃發も、彼には過激とは思はれなかつた。例へば彼は、政府は混合結婚を許可する事に依つて、加特力教徒の兩親に「二重の私生兒」を育て上げることを强ひたのである、といふやうな激烈な言を吐いた。かつ彼は、バイエルンの王が新教徒の母の息子であり、自らも混合結婚を行つたといふ事實が存するにも拘はらず、かゝる言を敢てしたのである。

その後、トレーヴ(Trèves)に於ける、基督の聖服に關する、眞僞の爭論が勃發した時に、ギュルレスはトレーヴへの巡禮を、擧行することに成効した。この一行にライン沿岸地方の人々は、新教的の普魯西を怒らせむが爲に、百萬人ほども加はつた。彼に取つてはこの巡禮は「優勢なる教會の凱旋」であつた。聖服の眞正に對する疑惑、並びに他の場所に於いても、かゝる服が眞正なるものとして示されるといふ反對論をば、彼は新約全書に於ける、麪包の不可思議なる增加を引證することに依つて排斥した。(Sepp, Görres und seine Zeitgenossen. 1877.)

形式は、內容とは絕對的に獨立せるあるものであるといふ、浪漫派の文學上の宣言は、ゲンツに依つて政治上に於いて實現された。クライストが獨逸のメリメーであるとすれば、ゲンツは獨逸のタレーラン(Talleyrand)であると言はれ得る。成熟時代の彼は、メッテルニッヒが彼の肖像の下に書いた「須く激情の表出を避くべし」(„Nur kein Pathos!“)といふ言葉をば、彼の肖像の下に書くことが出來たであらうに。彼は浪漫派の「イロニー」の權化であり、「ルチンデ」の精神の體現である。尤も彼は、革命の騷擾及び那翁戰爭の後に、外交上の活動が續いて起つた時、即ち彼の四十歲の時

に、始めて典型的人物となつたのである。その時代の標語は反動であつた、即ち休安――何はさて措き休安、歐羅巴の總ての火事の鎭火と、靜謐――歐羅巴の有らゆる疲勞者、患者及び平癒者の爲の深き靜謐とであつた。かくて一切の努力は、病室に於けるが如く、釀亂者を放逐して、而して出來るだけ靜肅に、喧騷や騷擾を防止する事を目的として居つた。ゴットシャルは恁う言つてゐる「ゲンツは、人間の運命に依つて震撼せしめられず、下界では血が滔々として流れようとも、神々の杯よりネクタール及びアムブロージアの一滴をも零さなかつた、かの形容すべからざる光澤、かの古典的平滑、及びかのオリムプ的の崇高をば、官憲的公文に與へることが出來た。諸國民の間を不和にした、瑣々たる撞突の上を、上品に輕く滑り行くことは、當時の專制的政策に柔和な、優雅な外貌を與へた。人々はたゞ空氣の唸りをのみ聞いて、爆聲を聞かなかつた。それは、氣銃の響きなき銃殺であつた。」表面上、人々は合法主義を標榜してゐたが、實際に於いて、それは虛僞及び僞善であり、實際に於いて人々は自己の利害に依つて、非常に非合法的となつた。かゝる場合に於いて人々は、「自己を保護し得る人よりも、何人もより合法的ではない」といふゲーテの言葉

に從つて行動したのだ。人々の辯護したことは、かくして、善良なることではなかつた。然し曲事の辯護者すら、彼が卓拔なる才能を有する時は、吾人の興味を牽き付ける。而してゲンツは非凡なる才能を持つてゐる。ヴァルンハーゲンは彼に就いて恁う言つてゐる「獨逸の學校の塵埃が、より大いなる光彩を以て捲き起されたことは、以前にはなかつた。學問が、かゝる利益を生ずるやうに、誇示された事は、以前には決してなかつた。」

フリードリッヒ・フォン・ゲンツ (Friedrich von Gentz) は、一七六四年にブレスラウに於いて生れた。彼の兩親は、中流階級に屬してゐた。而して彼が後に、社會に於ける最高の地位に到達した時に、彼は何事をも彼の素姓に歸せずして、總てを彼の才幹に歸した。キョーニッヒスベルグの大學に於いて彼は、大いなる熱心を以て、カントの哲學を研究した、而して當時は尙熱烈なる青年として若き不幸なる婦人、エリザベート・グラウン (Elisabeth Graun) と切實なる、かつプラトーニックなる關係を結んだ。一七八六年に彼は、伯林に來つて官吏となり、而して此處で、ある財政官の娘と便宜結婚 (mariage de convenance) を做した。同市に於いて、彼は非常に放恣なる生活を送り、

「神經衰弱的の罪人と迷信的なる婦人が、老王フリードリヒ二世の周圍を取り卷いてゐた」宮廷の、有らゆる愚劣なる娯樂に關與した。

かゝる生活の眞中に、佛蘭西革命が彼を驚かした。同革命の最初の効果は、彼の心に、若々しい熱情を惹き起すといふことであつた。當時彼は恁う書いた「この革命の失敗をば、予は嘗て人類を驚かしたる、最も酷烈なる不幸の一つと考へるであらう。この革命は哲學の、最初の實際的凱旋であり、主義及び系統の上に建設される、政府の形式の、最初の實例である。この革命は、多くの古き邪惡の下に呻吟しつゝある人類に對する、希望であり、慰藉である。この革命が失敗に歸するであらうならば、一切のこれらの邪惡は、一層不治的のものとなるであらう。予は、絶望の沈默が到る處で理性に反抗して、人間はたゞ奴隷としてのみ幸福であり得ることを認容するであらう事を、かつ有らゆる暴主は、大いなるも小なるも、この恐る可き認容を利用して、佛蘭西國民の覺醒に依つて惹き起されたる、恐怖に對して復讐するであらう事を、充分に想像することが出來る。」

然し間もなく佛蘭西革命に伴つて生じたる、恐怖すべき事どもは、彼の立脚地を

全然變換せしむるに至つた。彼は俄に舊時代の、最も熱心なる辯護者となつた。公論の優越權及び「群をなして進行する暗愚」に對する抗爭が、彼の主要なる任務となつた。彼は佛蘭西革命に於いて、幾世紀以來の不正及びそれに對する醱酵の、必然的結果を認めることが出來ない。彼は冷かなる理智的教育の過度、啓蒙の過度が、無政府狀態の原因であると公言してゐる。これは、眞に浪漫的なる傾向である。

彼が彼の最初の論文「法の根源及び最も主要なる原理」(„Ueber den Ursprung und die obersten Prinzipien") に於いて、熱烈に辯護したる「人權」は、彼には今はたゞ「初步の準備的研究」としてのみ、政治家に取つて意味あるものであるやうに思はれた。人權の原理は、治國の術に取つては、彈道學の數學的原理が、射擊に對するが如きものに過ぎないやうに、彼には考へられた。今や、國家生活に於ける主要勢力として、國民を認めず、政府をのみ認むる、偏狹なる反動的の觀念が、徐々として彼に於いて發展した。立法に於ける國民の協力をば、彼は、單なる形式と考へてゐる、而して自由は、心からの服從と考へられるに至つた。

然しギルヘルム・フォン・フムボルトとの交際と、調和的なる私的及び國家的生活に

關する、當時の美學的觀念の影響とが、彼の原理を稍〻和げるに至つた、而して今や英國の憲法が、ゲンッの理想、となつた。然のみならず、フリードリッヒ・ギルヘルム三世が王位に登つた時に、ゲンッは出版の自由を要求する請願書を、王に差し出した—その出版の自由を、彼はその後數年にして、一切の邪惡の源泉と名付くるに至つたのであるが。勤王家のゲーテは、君主よりあるものを奪取せ(アブトロッツエン)むとするの試みに就いて、非常に驚かされた、而して王がかの請願に對して何等の注意を向けなかつた時に、ゲンッは直ちにそれを撤回して、その事を曖昧の埋に葬ることに腐心した。この時より彼は、英國政府から送金されるやうになつた。彼は全然、彼自身を賣つたのではなかつた、英國の利益を主とする彼の政治的活動に對して、定期のかつ高額の金を受けたのである。それにゲンッは、金の必要に迫られてゐた。彼は賭事をしたり、女優及び踊り女等と自由なる交際をなしたり、常に放恣なる生活を營んだが、かゝる生活は、折々彼の感傷性に依つて中斷された。彼は「妻とは樂しき、それでも荒涼たる半生」を送つた。一八〇一年四月に於いて、彼は日記に「ある犬の死に就いての深き感動」を書いた。ヴイマールへ行つた時には、彼は當時の文學の大家

とも會つたが、そこにて女詩人アマーリエ・フォン・イムホーフ(Amalie von Imhof)と相知り、彼女を熱烈に戀するに至つた、而して彼の生活を根本的に改造しようとの計畫をも立てた。然し伯林へ歸るや否や、彼は恁う書いてゐる、「ヴイマールに於ける計畫の結果——十二月二十三日に私は賭事をやつて、所持金を悉く失つて了つた。」彼は尙暫くアマーリエ・フォン・イムホーフに宛てゝ、六葉乃至八葉の長さの書翰を書いてゐたが、その後女優クリステル・アイゲンザッツに狂熱的なる戀をなすに至り、それが爲に萬事を忘却した。„Maintenant c'est le délire complet !"(今はもう申し分のない狂妄だ!)と日記に書いてある。こんな騷ぎの內に、彼の妻は彼を見捨てゝ、離緣を申込んだ。彼女の去つた晩には、彼は trente et quarante を遊ぶ事に依つて、鬱憂を晴らさむと努めた。然し伯林に於けるより長き逗留は、種々の理由よりして、彼には今や不愉快にかつ不可能になつたからして、彼は墺地利に於ける任用の提出に應じて、維也納に行つた。同市に於いては彼は、漸次メッテルニッヒの手中の器械と墮するに至つた。

然しこの事が起つた前に、ゲンッは彼の光彩ある時代を持つてゐる。佛蘭西の

至上權に屈服せる維也納人の無感覺は、敏活にして沈毅なる、天才肌のゲンツを奮起せしめずにはゐなかつた。彼の精神を鼓舞せる、那翁に對する燃ゆるが如き憎惡は、彼等の窮迫と挫折との間に、暫く彼をば、獨逸のデモスセネスとなした。然し彼の熱烈に冀求したものは、獨立にして自由ではなかつた。彼には、那翁に於いて全革命が集注したやうに、思はれた。暗殺の如き手段をすら選ぶことを、彼は躊躇しなかつたであらう。全力を以て彼は、獨逸聯邦の間の聯合と、獨逸國民を飛躍せしめる事とに努力した。然し彼の性情に從つて、彼は國民に對してよりは寧ろ、國民の運命を掌中に握れる、少數の選ばれたる人々に對して、多くを期待した。„Politische Fragmente“ に於ける彼の序文、彼の宣言書及び宣戰布告書は、鬱勃たる情熱を以て、流暢にして絢爛なる、而も男性的の、興趣に富める筆致を以て、書かれてある。ウルム及びアウステルリッツに於ける戰すら、彼の意氣を沮喪せしめなかつた。然しイェーナの戰の前に、普魯西の悲慘なる狀態を目擊した時には、彼は深き悲哀に沈まないではゐられなかつた。ヨハンネス・フォン・ミュルレル等が那翁の爲に買收される事を甘んじた時にも、彼は獨り斷乎として屈服しなかつた、而してミュルレルに宛

てた有名なる書翰に於いて、「不斷の開城にも似たる生活」を營める人々に對する、峻烈なる嘲罵を書いてゐる。然し一八〇九年より一八一〇年の間に於いて、墺地利が國家としての抗爭を放棄し、而してかゝる場合に際して屢々起こるやうに、奢侈輕佻の風が衰微せる國内に遍く漲つた時に、ゲンツもまた、滔々たる享樂の渦中に陷つた。かくて彼は財產を悉く消費して了つた、而して終にはメッテルニッヒとの結合をば、難船に際しての、唯一の救助板として認めるに至つた。タレーランに依つて「週間的政治家」と呼ばれたる、かつある露西亞の名士に依つて「假漆を塗られたる塵芥」と嘲けられたる、この政治家の影響は、ゲンツに取つて、決して幸福なる者ではなかつた。

それからは彼の書翰は、彼が以前には夢にも知らなかつた、そして彼が「精神的肺病の一種」と呼んでゐる、「精神的の弛緩、勇氣沮喪、空虛、無關心」についての悲嘆で滿たされてゐる。それからは彼は自分のことを、「恐ろしくも飽厭せる者」と呼んでゐる。彼はラーエル (Rahel) に恁う書いてゐる、「まア聽いて下さい、私はおそろしくも飽厭して了つた。私は世間の酸いも甘いも充分に味つた、かくして何んな幻影、何んな

華美なものを見せられても、心を動かされなくなつた。……私は何事に依つても歡喜を感じ得ない、然し非常に冷淡で、飽厭的で、嘲世的である。私は世間の殆ど總ての人間の愚昧と、私自身の――叡智ではない――目先の鋭く、洞察力の深いことを、過度に信じ切つてゐる。かつ私は、謂はゆる偉い事柄が、終にはこんな笑ふべき結果に終ることに對して、内心に於いて、殆ど惡魔のやうな喜悦を感じてゐる。」彼は、彼が以前には實に熱烈に願つてゐた、那翁の破滅が、彼の心を餘り動かさなかつたくらゐ、元氣なき人間となつた。「私は限りなく老衰せるかつひどい男となつた」と、彼はフリードリッヒ・シュレーゲル的の、愛敬ある厚かましさを以て言つてゐる。彼が絶えず死の恐怖に襲はれ始めたのも、丁度この頃である。彼はそれからは常に、彼の日記に於いて、その恐怖の度合を記しつけてゐる。彼の書翰は、神經病的の婦人の有する、有らゆる弱點を示してゐる。彼とアダム・ミュルレルとの間の書翰は、特に滑稽的である。彼等は二人とも、雷鳴に對して恐怖をもつてゐるが、それが有らゆる彼等の書翰に表はれてゐる。然のみならず、一つの書翰すら、ゲンツに取つては堪へられぬ程の効果を、持つてることがある。彼はミュルレルに恁う書いてゐ

る、「君の書翰は私の弱い感情神經を粉碎する。」死の恐怖は大抵、暗殺に對する恐怖の形を取つた。コッツェブーがサンドの短劍に依つて斃れた時に、自由主義の青年の、憎惡の犧牲になるかも知れぬといふ彼の恐怖は、その頂點に達した。輝けるナイフを見ても彼は、彼の書翰にも告白されてあるやうに、氣絶することがあつた。彼は一八一四年に、ラーエルに宛てゝ恁う書いてゐる、「さて有りがたい事には、巴里のことは悉皆、片が附いた。私は神樣のお蔭で、甚だ健康だ。私はバーデンに居たり、維也納に居たりする、それから甘い食麵包に、上等の牛酪を附けて食べたり、非常に旨い菓子を食べたりしてゐる。それに私は、私の心を大いに喜ばせる家具を手に入れた、そして餘り死を恐れてゐない。」

彼はこの頃は、眞面目に書くことの出來る唯一人の人として、ギュルレスに囑目してゐた、而して自らは何を書くことも出來なくなつた。同時に彼は、王侯との面會を謝絶することが出來るほど、社會的には高い位地に達した。一八一四年十月三十一日の日記には恁うある、„Refusé le prince royal de Bavière, le roi de Danemark etc.“（「バヴァリアの皇子、丁抹の王等との面會を拒絶する。」）彼はタレーランと出會つて、非常

に彼を崇拜するやうになつた。この崇拜の念に實際的方向を與へむが爲に、この拔目のない佛蘭西の外交家は、佛蘭西王の名に於いて、二萬四千グルデンを彼に送つた。一八一四年の終りに於いて彼は、日記にかう書き付けてゐる、「公的の事柄を視ると、悲しべき狀態が續いてゐる。……然し私は何等の責むべきことを持つてゐないからして、世界を支配するこれらの憐れむべき人物の、憐れむべき行動に關する、私の精確なる知識は、私を悲ますどころか、大いに私を樂ませる。而して私はこれらの光景を、特に私の私的娛樂の爲に供へられたものであるかのやうに、享樂するのである。」これは、ジャン・バウルのロクワイロルの、言葉のやうではないだらうか。生に疲れたる彼に對しては、いかなる平和の妨害といへども、厭はしくなつた。何んな事をしても秩序を維持するといふことが、彼の目的となつた。一八一五年には、彼はギュルレスに反對して、巴里の平和を辯護してゐる。然し彼は、學生結社（アトルシエンシヤ）、古獨逸の衣裳及び愛國的排異國的の演說等に對して、彼の辛辣なる嘲罵を浴せないではゐられなかつたくらゐ、怜悧で、かつ冷靜であつた、そして空言の大いなる嫌惡者であつた。然しコッツェブーの暗殺は、愛國的結社を禁ずべき口實を彼に與へ

た。何者、暗殺や犯罪が、到る處に起こらむとしてゐたからである。大學が管理せられ、印刷が抑壓せられたといふ事も、ゲンツの盡力に歸せらるべきである。彼は今や出版の自由に就いて、恁う書くやうになつた、「予の意見に從へば、印刷の濫用を防遏する爲には、若干の年數の間、印刷が全く禁ぜられねばならない。充分權能ある法廷に依つて規定せられたる、極めて少數の例外を許容して、この原則を適用するときは、そは幾何もなくして、吾人を神と眞理とに復歸せしめるであらう。」

希臘の獨立戰爭が破裂した際に於ける彼の言說は、彼の反動に對する熱心にも拘らず、彼がアダム・ミュルレル等の如く、合法主義及び王の神聖なる權力をば、啓示せられたる眞理として眞面目に信仰するには、餘りに賢明であつたことを、證明する。一八一八年に於いて彼は、ミュルレルに宛てゝ恁う書いた、「君は、予が、彼が欲する時には、常に神意に從つて書き得ると呼ぶことの出來る、獨逸に於ける唯一人である。この厚顏なる現代に於いても、君と比肩しようとする人間の厚顏よりも、より多く予を驚かせ、かつ憤らせるものはないであらう。……君の系統は完結せる全體である。その何れかの點を攻擊しようとする事は、無益な業であらう。吾人は全

くその說に服するか、或は全くその說に服しないかの、何れかを取らねばならない。君が、一切の眞正なる智識、自然の洞察、立法及び社會組織、それに歷史(君が何かで主張してゐるやうにすらも、神的啓示の顯現であり、かつたゞそれよりのみ發生し得るといふことを、吾人に證明しかつ理解せしめるならば、君は(少くとも私と共に)一切を獲得したのだ。然しこれが君に成功しない間は、吾人は遠方に立つてゐよう、そして君を嘆美し、かつ敬愛しよう、――然し渡り難き溝渠に依つて、君とは別たれるのだ。」吾人は、アダム・ミュルレルが神聖なる三位一體よりして、唯一の原理に依存せる國民經濟上の系統は、何れも虛僞なものであるといふ結論をなしたといふことを、想ひ起さねばならぬ。かくして彼は、三度耕作(Dreifelderwirthschaft)の必要なことを證明した。今や希臘が奮起するに及んで、ゲンツは、合法の原理は時の製作物であるが故に、時に依つて變換されなければならぬといふ說をなすに至つた、而して次の如き注目に價ひある言說をも吐露した、「私は、私の支配人の一切の威權及び强さに拘らず、吾人に依つて獲得されたる個々の勝利にも拘らず、時代精神は要するに吾人よりも更に有力であることと、出版は、そが度を逸する時には輕蔑すべき

ものであるが、有らゆる吾人の知識に對して、恐るべき優越權を持つてゐるといふ事と、外交術も威力も共に世界の車輪を喰ひ止め得ないといふ事とを、これまで常に意識して居つた。」

六十五歲になつてから、この老耗しかつ痲痺せる老人は、彼の年齡及び精神的傾向とは極めて奇怪なる對照をなせる、二つの情熱に依つて捕はれた。青年が再び彼に復歸したのだ。その一つの情熱は、當時十九歲の踊り女、ファンニー・エルスレル(Fanny Elsler)に對する、眞に熱烈なる戀愛であつた。彼の書翰には恁う書いてある、「私は彼女をば、一に私の愛の魔力に依つて牽き付けたのだ。彼女が私といふものを知らない以前には、彼女はかゝる戀愛があらうなどとは、夢にも知らなかつた。……總ての點に於いて私を樂ませる人物との、日々の妨げられない交際を想像して下さい。……その女性を私は、慈父の如き溫情を以て敎育してゐる。彼女は、同時に私の戀人であり、私の子供であり、かつ最も優れたる敎へ子である。」

彼の心を占領したるも一つの情熱は、その頃出版せられたるハイネの詩集、Buch der Lieder"に對するそれであつた。彼はこの大膽なる詩人を「狂的なる冒險者」と呼

んだが、それは何の甲斐もなかつた。この老いたる反動主義者は、この詩人の幻術に反抗することは出來なかつた。彼は次のやうな事を書いてゐる、「私は今でも矢張 „Buch der Lieder“ を愛讀する。プロケッシ“(Prokesch)の如く、私は幾時間も、この憂鬱的に甘美なる水の中に浴する。讀神的とも稱し得べき詩をすら、私は深い感情なしには讀み得ない。私は時として、私が數々かつ喜んで、かゝる詩を繰返すことの爲に、私自身を責めることがある。」彼の感受性は、かゝる場合に於いても、反抗し得なかつたのだ。彼が彼自身を女性として取り扱つてるのは、大いに當を得てゐる。「ルチンデ」に於ける、男女兩性的の點を忍ばせるやうな調子を以て、彼はラーエルに恁う書いてゐる「愛する人よ、あなたは、何故に私達の關係がかくも完全なものであるかを知つてゐますか。私はあなたにそれを申しましやう。あなたは、無限に創造的な人であり、而して私は、無限に感受的な人間であるからです。あなたは大いなる男子で、而して私は嘗て生きて居つた、有らゆる婦人等の最も大いなるものであるからです。」彼は今や、力强き握手をも恐れ、軍人風の髭を見てさへ、もの恐ろしくなるほど、神經過敏になつた。惡意なき旅人の訪問も、彼を恐れさせた。彼は彼

等をば、姿をやつせる殺人者だと思つたからである。彼の最後の年に於いては、彼の姿勢は曲り、彼の歩行は極めて不確實となつた。青年時代の誇りであつた、明かなる、さかしげなる眼は、臆病らしい表情に依つて曇らされた。集會に於いては彼は、大きな黑い眼鏡を掛けて、風采を引き立てようとした。ファンニー・エルスレルが嘗てある宴會に於いて、泡立てる三鞭酒の一杯を彼に獻じて、戯弄するやうに、„Der Krug geht solange zu Wasser, bis er bricht“(「水瓶が度々井に持ち行かれて、終に壞れて戻つて來る。」)と言つた時に、ゲンツはかう答へた、「私とメッテルニッヒと生きてるうちは、まだ壞れずにゐよう。」この問答の中に、彼の性格と、彼の立脚地に對する批判とが含まれてゐる。

宗教上に於いては、ゲンツは非常に動搖的であつた。ある時は彼は、宗教は彼にはたゞ政治的事件に過ぎないと言つた。ある時は彼は、彼は表面的には決して加特力教に入らなかつたとはいへ、浪漫的に、同教に對して大いなる讓歩をなした。那翁を惡魔の權化と見做し、かつ一八〇六年七月に於けるゲンツに宛てた書翰に於いて、「基督教徒として吾人は、吾人の心中のボナパルトを征服しなければならぬ」

と言つてる、加特力教の神秘家アダム・ミュルレルをば、彼は極端に畏敬してゐた。かつ彼は、その頃墺地利の皇帝に宛てた建白書に於いて、普魯西の官職を辭する理由の一つとして、「新教に對する年來の敵意」を擧げてゐる。彼は「新教の本來の性質と、益々募り行く邪惡なる傾向とに於いて、充分なる檢覈の後に、現代の有らゆる腐敗の根源と、全歐洲の衰微の主要なる原因の一つとを發見した」と信じてゐる。

政治上に於いては彼は、明瞭なる意識を以て、公然たる反動を代表してゐる、而して彼は他の僞善的なる反動主義者の如く、その言葉を用ゐることを避けたりしない。一八二二年に於けるヴェローナからの書翰に於いて、彼は彼がメッテルニッヒの許に於ける晝飯の集會に際して、始めてシャトーブリアンと面會したが、その人は彼に對して非常な慇懃と愛敬とを拂つたといふ事を、物語つてゐる。彼はシャトーブリアンに就いて、恁う書いてゐる、「彼は、四五年前に總てが希望なく見えた時に、極めて少數の人物が、歐羅巴に於いて奮起し、革命を克服することを決心し、而して今日では內閣及び軍隊と力を併せて、共通の敵に肉迫し得るやうになつたことは、歷史上において看過すべからざる、注意すべき現象だといふ事を、力說した。この大膽な

る反動の、二つの大いなる時期として彼は、Le Conservateur（保守倶樂部）の設立と、カルヽスバードに於ける會議とを擧げてゐる。彼は殆ど多血質的なる勇氣を以て未來を豫見し、而して正しき黨派の勝利を確信してゐる。彼の考へに從へば、眞の力と眞の才能とは、十人或は十二人の頭腦に集注せられて、吾人の側に存するのだ。革命家の攻擊に餘り多くの重味を置いたり、或はそれを恐れるほど、吾人に取つて危險なことはない。彼等は要するに、淺ましき饒舌家に過ぎない。而して彼は、バンジャマン・コンスタン、ギゾー(Guizot)、ロアイ、エー・コラール(Royer-Collard)の如き人々が、著述家及び演說家として、どのくらゐ世間的評價に於いて低下したかを、想像することは出來ないなどと言つた。これらの事を、彼は少しも熱することなしに、極めて靜かにかつ冷かに物語つた。」

ゲンツがこれを書いた時に彼は、この人物は癒ていかなる驚駭を彼に與へるであらうかを、夢にも知らなかつたのだ。その後二年にして、この世紀の文學史に於ける轉回點、言はゞ分水界となる可き事件が起つた。即ちシャトーブリアンが內閣から追はれて、反對の自由黨に轉じて、その首領となつたことである。それと同時

に起つた、バイロンの死と相並んで、全文明世界に於ける自由主義を武裝せしめたのは、この事件である。

ゲンツは、彼の憤怒を制することが出來なかつた。書籍檢閲の撤回に關する、シャトーブリアンの論文が、„Journal des Débats“に現れるや、彼はある友人に宛てゝ、恁う書いた、「私は貴方がシャトーブリアンに就いて言ふ、一々の言葉の下に、線を引く。私もこの眞に怪しからぬ論文で以て、いつになく腹を立たせられた。これは、太鼓や笛を以て敵の平和を妨げる事が出來ない時には、松火を取つて彼等の家の屋根に放火するやうな人間の書いたものだ。今日の佛蘭西では、人々は自分の欲するが儘に行動しても宜いのだからして、かゝる行爲も決して怪む可き事ではない。何者、復讐心强き反對黨に一歩を踏み入れるや否や、(この兇漢が彼の免職後三日にしてなしたやうに)、義務、名譽及び風儀を無視する事の出來た人間は、自己の無氣力の感情に常に刺激されて、入牢の危險を冒す事なく(而して彼の國に於いて何處にかゝる危險があらうか)、出來るだけの事を敢行したに違ひないからだ。」

然しゲンツの憤怒は、事件の進行を妨遏し得なかつた、而して彼が代表せる反動

は、最後の痙攣を苦まねばならなかつた。

一八二〇年に於いて書かれたる、Pilat(ピラート)に宛てた書翰に於いて、彼は恁う言つてゐる、「メートル(或はメーストル)と相對しては、Duller(ドゥラー)や La Mennais(ラ メネー)やは何であらうか、Bonald(ボナール)以外の現代の總ての文學者は何であらうか。メートルの著書 „Ueber den Papst“(法王に就いて)は、私の感情に從へば、この半世紀に於いて現れたる、最も崇高なる、かつ重要なる著書である。あなたは、それを讀まなかつたに違ひない。若し讀んだとしたら、何うしてあなたは、それに就いて默してゐられようか。私の忠告を容れ給へ——あなたは、その書を漫然と(à bâtons rompus)讀み給ふな、あなたが常に圍繞されてゐる喧騷の中でそれを讀み給ふな、然しその書を讀むことを、あなたが不斷の安靜と思想の集注と得る時まで、控へてゐ給へ。あなたの謂はゆる友人は、確かにそれを讀んだのだ、然し何人もそれに就いて一言をも語らないのだ。かゝる食物は、これらのなまぬるい、批評的な人間には、强過ぎるのだ。私はそれを讀んで、眠れない夜を時々經驗した、然し私はそれを以ていか許りの享樂を購ひ得たらう！洞察力は深く、博識の點に於いては驚嘆すべく、モンテスキューといへども持つ

てゐなかつたやうな政治的眼孔はあり、雄辯はバーク(Burke)に比すべく、折々詩的情熱の閃きあり、之に加ふるにあらゆる世間的才能と、他人の學說及び意見を紛碎すると共に、それらの人々を容れる雅量と、非常な世間的知識とがある――而してこれらのものが悉く、かゝる議論の爲に用ゐられて、かゝる効果を生じたのだ！今や私は、教會の決して滅亡せざる事を確く信ずる。各々の世紀に於いてかゝる星が一度輝いた丈けでも、教會は存續する許りでなく、勝ち誇る事も出來よう。この書は二三の弱點を持つてゐる！私は、私の嘆美が盲目的に見えない爲に、それを言ふのだ。然しそれらの弱點は、太陽に於ける斑點の如く、肉眼には見られない。メートル以前に、法王がいかなるものであるかを知り、かつ感じた人は幾人もあらう。然しいかなる人も、メートルの如く意見を發表することを、決してしなかつた。現代の憐れむべき人々が殆ど注意せざる、この非常なる著書は、實に半生の努力の結果である。今や七十歳以上の著者は、確かに二十年間を、その書の爲に費したのだ。吾人は、羅馬に於ける第一流の寺院の一つに於いて、彼の記念碑を建てなければならない譯だ。總ての王は敎を乞ふべく、彼の許に集合すべきである。然し事實に

於いて、彼が彼の全財產を消費し盡したる後に、彼が政府より辛くも受くることの出來た總ては、大臣としての稱號と、彼がTurin(テューラン)に於いて極めて質素に暮らす事の出來る丈けのものとである。いかなる人間も自分の子供等に、次の如くに誡める權利を、彼よりもより多く持つてゐなかつたらう。

Disce, puer, virtutem ex me, verumque laborem, Fortunam ex aliis!

(子供等よ、予より道德と活動とを學べ、而して他人より幸福を學べ！)

何といふ人物であらう！而して現代人のいかに少數が、彼が生存してゐることを知つてるであらう！」

此處に再び吾人は、獨逸の反動が、佛蘭西の反動に轉移する點の上に立つてるのである。この點に於ける、予が議論の徑路に就いて、充分なる理解を有せむとするものは、佛蘭西の反動時代に於ける雄偉なる人物、メートル(Joseph de Maistre)に就いて充分に研究する必要があらう(第三卷、佛蘭西に於ける反動の中の、ジョセフ・ド・メートルの條を參照せよ)。

要之、獨逸の反動は、その本質に於いて文學的であり、佛蘭西の反動は、政治的であ

り、宗教的である。前者は、漸次に加特力教に流れ込んだが、後者は、公然にそして徹底的に加特力教的である。後者は實に有らゆる精神的及び社會的範圍に於いて、傳習的權威を維持することを努めてゐる、而してド・メートルは、同反動の、最も熱心なるかつ最も純正なる代表者である許りでなく、同派の最も大いなるかつ最も強烈なる才能者の一人である。この、死刑執行者及び火刑柱の勇敢なる讃美者は、啓蒙と人道主義の理想との、根柢的なる由々しき大敵である。

獨逸の浪漫家は、薄暮と月光とを愛した。純理主義の明かなる白光と、佛蘭西革命の電光とは、彼等をして薄暗き光の中に、樂しき休安を求めしめたのだ。然しノヴーリスの夜の愛すら、ジョセフ・ド・メートルの闇黒の讃美に比しては、何ものであらうか。

古代の傳說は、アポローの子、ファエートン(Phaëton)がある日、太陽の神ヘリオスの車を馭するといふ許可を得たが、太陽が全地球を焦がし、都市や宮殿を燒失せしたほど拙劣に、車を操つたといふ事を物語る。その傳說は尙、ある國民はそれが爲にいたく恐怖して、永久の闇黒を神々に嘆願し始めたといふことを、附け加へてゐる。

ド・メートルはかゝる國民の苗裔である、而して彼の才能、彼の神意に對する信仰、及び彼の人間に對する輕侮に依つて、偉大と稱せられ得べき人物である。而して今日に於いても尙、かゝる國民の苗裔は存在する、而して彼等の姿は矮小となり、かつ彼等は愈々臆病にかつ無能になつて行くが、彼等は愈々執拗に自己を主張せむとしてゐる。鋭敏なる聽覺を有する人は、「闇黒を！もつと闇黒を！」といふ言葉を、明かに聽き得るであらう。而して彼等が思想と目的とに於いて、貧弱であればあるほど、愈々聲高く、彼等は絕叫する、而して彼等の唯一の信仰は、闇黒の力に對するそれである。

獨逸浪漫主義に於いて、特に十八世紀の精神に對する反動の增長を研究する人々は、獨逸の浪漫家が性格の强度及び性格の統一に於いて、ド・メートルの如き反動主義者に、いたく劣れることを認めずにはゐられないだらう。然し獨逸の浪漫家は、決して政治家でもなく、策士でもなく、文學者であり、詩人であつた。而して彼等の中にて、ゲンツの如く、文學から政治への推移を代表せる人々すら、文學者としての外、何等の眞正なる意義を持つてゐない。

純文學的の立脚地から觀察されるときは、獨逸に於ける浪漫派は、永久的の興味を持つてゐる。同派の代表者の獨創性と顯著なる特質との、充分なる印象を經驗せむが爲には、吾人は彼等をただ、他國の浪漫派と比較すれば足りるのである。

浪漫的潮流は、この世紀の初めの十年間位に於いては、歐羅巴の殆ど總ての國土を通して流れてゐる。然し同運動は獨逸、英國及び佛國に於いてのみ、眞に獨特なる意義を持つてゐる。そは、これらの國々に於いてのみ、歐洲的主要思潮である。スラヴ種族の國土に於いては、吾人は主として英國浪漫派の反響を認める。スカンディナヴィヤの諸國に於いては、浪漫派の文學は、獨逸のそれに著く影響されてゐる。

浪漫主義が„Phosphorismus“（空想的浪漫家の機關雜誌„Phosphorus“より生じたる名。譯者。）或は「新派」（„neue Schule“）の名に依つて知られた瑞典に於いては、同主義は、他の國々に於けるが如く、瑞典の官學派に依つて代表せられたる、文學上の古佛蘭西的の趣味を攻擊した。一八〇七年に於いては「オーロラ倶樂部」（„Aurora-Bund“）がアッテルボーム（Atterbom）、ハムマルスキョールド（Hammarsköld）及びパルムブラード（Palmblad）から設立された。その倶樂部の宣言した主義は、根柢に於いては、獨逸浪漫派のそれであつた。人々はシェリング

の哲學を讃美し、シェリング學徒の辯證法に依つて、形而上學と基督教との關係に就いて議論した。人々は啓蒙思潮を輕蔑し、マドンナ及びカルデロンを崇拜し、シュレーゲル兄弟及びティークを嘆美し、かつ神に惠まれたる王權を謳歌した。アッテルボームは彼の自然哲學的の象徴主義に依つて、ティークを忍ばしめ、スタグネリウス（Stagnelius）はある點に於いて、ノヴァーリスを聯想せしめる。それにも拘らず、この國の運動は、明瞭なる國民的特質を持つてゐる。

那威に於いては、孤獨なるヴェルゲランド（Wergeland）は、彼の惑溺的性質にも拘らず、獨逸の浪漫的精神の反對者として立つてゐる。然しアンドアレス・ムンヒ（Andreas Munch）は、明らかに獨逸的典型の浪漫家である。而して北歐の國民童話がアスビョルンゼン（Asbjörnsen）及びモーエ（Moe）に依つて出版せられ、北歐の民謠がランドスタッド（Landstad）から蒐集せられたが、これらの事は總て、浪漫派の運動に依つて、北歐の文學者の心に刺戟せられたる、民庶的なるものに對する偏愛の結果に外ならない。

丁抹に於いては、獨逸及び同國の浪漫派の關係は、甚だ複雜なる性質を帶びてゐる。通例、丁抹の詩人は、彼等の最初の衝動を獨逸より受けるが、後には然し、自己の

道を進むやうになる。オヱーレンシュレーゲルはシュテッフェンスに依つて覺醒せしめられ、而してこの世紀の初めに當つては、ティークから影響せられた。グルントヴィーグが、彼の青年時代の純理論から離れたのは、獨逸浪漫派の影響に依つてである、而して彼の國民的感情及び通俗的傾向に對する者も亦、獨逸に於いて發見せられる。フーケー及びホッフマンの影響は、インゲマンに於いて認められ、ハウフ(Hauch)は、ノヴーリスを渴仰し、ハイベルグは、童話劇の作者としてはティークより、アンデルゼンは、空想的の物語作者としてはホッフマンから學んでゐる。生れは獨逸人なるシャック・シュタッフェルト(Schaack Staffeldt)は、青い花の禮拜に沒頭せる、純乎たる浪漫家である。

然し予がこの書に於いて證示したる如き外國の影響は、到る處に跡付けられるとはいへ、丁抹の浪漫派の獨立的なる、國民的なるかつ北歐的なる特質は、明瞭に認められるのである。

附錄

人名索引

あ

アイゲンザッツ（クリステル・）……二、五八三
アイヒエンドルフ……二、二三・四四九以下・四六四・五七五
アウエルバッハ……二、三八四
アスピエルンゼン……二、六〇三
アッテルボーム……二、六〇二・六〇三
アポロニウス・フォン・テュアーナ……二、五七三
アムベール……一、九〇
アリオスト……一、二三五・二、一一三
アリオン……二、二四六・三九六
アリストテレース……一、七・三四六・二、七七・二七八
アリストファーネス……一、三〇七・二、二三〇・五三七・五四五
アルニム……二、八・二九二・三四六・四一三・四三一以下・四五四・四七五以下・五六六・五七二
アルニム（ベッティーナ・フォン・）……二、四三三
アルバノ……一、二八五
アルント……二、五四七・五五〇以下・五五二
アンチアン（デューク・ド・）……一、二四
アンデルゼン……一、一四・一五・一七・二、二四八・二六三・三一二・四二〇・六〇四

い

イッフランド……二、五八・二七七・五四二
イプセン……二、一三三
イムホオフ（アマリエ・フォン・）……二、五八三
イムメルマン……二、四六九
インゲマン……一、五一・二、一三七・三〇八・三九七・四〇一・五五七・五六二・六〇四

う

ヴァザリ……二、二三六
ヴァルンハーゲン……二、三一九
ヴァルンハーゲン・フォン・エンゼ……ラーエルを見よ。
ヴィーゼル・バウリーネ……二、一四八以下
ヴィーランド……一、二九六・二九七以下・二、四〇・八八・九二・一〇二・一五三・四五一・四八五
ヴィルブラント（アドルフ・）……二、四八一・五二〇
ヴィンケルマン……一、四五・二九六・二九七・三〇五・三〇六・三〇七・二、三四・七七・二三六・二四〇・二五二以下
ヴィンテル（クリスチアン・）……二、一五・四二二・
ウーランド……二、四三三・五四八以下
ヴェーベル（カルル・マリア・フォン・）……二、二三二以下
ヴェルゲランド……二、六〇三
ヴェルネル（ツァッハリアス・）……一、二〇八・三二四・三三四・二、一七・二三・二四・二三二・三四四・四三七・四三八・四四七・四六四・四七五・五二〇以下
ヴェロッキオ……一、二八五
ヴォルテイル……一、六・一〇・一一・一二・三六・四一・七三・八六・一三六・一四五・一九四・二二八以下・二九二・二九五・三一五・三三〇・三五〇・三五八・三七一・二、七・四六・六三
ヴルピウス（クリチアン・）……二、六一
ヴルピウス（クリスチーネ・）……二、四一

ゑ　え

エッケルマン……二、五六・五七・五九
エッシェンブルグ……二、八八・一〇二
エシロス……二、四八二
エムメリッヒ（カタリーナ・）……二、二三・四四九以下・四六四・五七五
エルヴェシウス……一、三二二
エルスレル（ファンニイ・）……二、九・五九一・五九三
エンゲル……二、三六

お　を

オイリピデス……一、二一四・二、六四
オエーレンシュレーゲル……一、一五二・二〇八・二二六・二三九・二七九・二八〇・三三七・三三八・三四二以下・三四六・三四七・二、四・一二・一三・一四・一五・五〇・二一三・二四七・三九四・六〇四
オーヴィッド……一、二八六
オシアン……一、五二・六〇・六一・六三・八九・一〇三・一一四・一二三・一八五・二、一〇四

か

ガーデ……二、一六
ガリレオ……二、三六一
カルデロン……一、三三六・三四五・二、六三・二二一・二三二・四一五・四七一・六〇三
カルプ（シャルロッテ・フォン・）……二、四二・四四以下・一五七
ガルフェ……二、三六
カロリーネ……シュレーゲル（カロリーネ・）を見よ。
カロー（ジャック・）……二、三〇八
カント……一、一一・三一六・三二一・三二二・三六五・二、八二・四八三

き

キアケゴール……一、三六・八一・八二・二八三・三三八・三四六・二、二〇・二七・五〇・五一・一一二・一一三・一二五・一二九・一三四・一三五以下・一四二・二二五・二八三以下・三四一
ギゾー……二、五九四
キューン（ゾフィー・フォン・）……二、三三三
キョプケ……二、二三九・二五九以下
キョルネル（テオドール・）……二、五七・四九二・五四七・五四八
ギョルレス（ヨゼフ・）……一、一三六・二、二七・二八・四一三・四

三二・四五四・五〇五・五三一・五三五・五五二・五五三・五六八以下・五八七・五八八

く

クヴィエー（ジョルジ・）……二、一八〇
クザン（ヴィクトル・）……二、五六
グッツコウ……一、三六三・三七七
クネーベル……二、一二六
クライスト（ハインリッヒ・）……二、五五
二、九・一四・一七・八五・二九二・四七九以下
クラウディウス……二、四一二以下
クラウレン……一、五一
グラウン（エリザベート・）……二、五七九
グリース……一、一六三
クリューデネル夫人……二、五七三
グリンム（フリードリッヒ・）……二、四七六・五五一・五七二
グリンム（ヤコブ・）……二、四三三・四七六・五五一・五七一
グルーノウ（エレオノーレ・）……二、一八〇
グルントヴィーグ……一、三三三・三四〇・二、一九・四〇一・四二六・五四九・六〇四
クレビヨン……二、一五三
クロイツェル……一、一三六
クロード・ロルレーヌ……一、二三八
クロップシュトック……一、五四・一二四・三七四

け

ゲーテ……一、三〇・三一・三四・三五・三六・四二以下・六〇・六一・六九・八〇・八九・一〇八・一一二・一二一・一二二・一二三・一二四・一二七・一三七・一四七・一四八・一四九・一五〇・一五一・一六三・一六五・一六六・一六七・一六八・一八六・二〇六・二三五・二五二・二九七以下・三二四以下・三三九・三六〇・二、三八・三九以下・四七・四八・五〇

以下・五四以下・七三・七四・八四・八七・九三以下・九七・九九・一〇一・一〇二・一〇三・一〇四・一一七・一三七・一四四・一四七・一四九・一五五・一六七・一七〇・一八〇・一九七以下・二一二・二一七・二二九・二三七・二三八・二四四・二五二以下・二六六・三二七以下・三八一以下・四〇二・四一五・四二九・四三五・四四九・四六五・四八一・四八二・四八七・五一一・五一三・五二七・五三四・五三五・五三八・五七八

ケストネル……一、五〇
ケラア（ゴットフリード・）……二、四四一・四四三
ケルネル（ユスティヌス・）……二、三四六
ゲンツ……一、三七七・二、一一五・二五五以下・四九六・五一〇・五六九・五七九以下・六〇一

こ

ゴーチエ……一、二五三・三三八
ゴールドシュミット……二、二七一・四二二
コッツエブー……二、五八以下・六一・一七九・二七七・五四二・五四四・五五二・五八七・五八八
ゴットシャル……二、二八・五九・五七八
ゴドウィン（ウィリアム・）……二、七
コベルニクス……一、三四〇
コルデイ（シャルロット・）……一、二九四
コルネイユ……一、五・二三一・二九四・三四四
コレッヂオ……一、二八五・二、一一三・二四九・二五一
ゴンタルド（ズゼッテ・）……二、八一
コンスタン……一、一一・一二七以下・一七八・一八三・一八八・一八九・一九〇・二〇八・二一八・二一九・二四五・三六五・三七四・三七七・二、五九五

コンディヤック――――――――――――――――――――――――一、三二二

さ

ザックス（ハンス・）――――――――――――――――――二、二一四・二四一
サン・シモン――――――――――――――――――――――一、一六五
サンド（ケー・）――――――――――――――――――二、五四七・五八七
サンド（ジョルヂ・）――――――一、一二・八九・一六二・二二〇・三七
七・二、五四・二八七以下・一九五以下
サン・ピエル――――――――――――一、一一・六〇・三七六・二、一八七

し

ジーユ（モッシール・――シルレル）――――――――――――二、六四
シエーキスピア――――――――――一、六七・九二・一五二・三二七・三四
五・三四六・二、七三・八六以下・一〇
四・一〇七・二一二・二一四・二六六
以下・三五八・四八二
シエーレル――――――――――――――――――――――二、一〇一
シエニエー（アンドレ・）――――――――――――――――――二、七六
シェリイ――――――――――――――――一、八〇・二、一九〇以下・三七〇以下
シェリング――――――――――――一、三一六・三二七・三三六・三三九以
下・二、一一・二五以下・三八・七六・八
二・一三〇・一四三以下・一六三以下・
一七〇以下・一七八・五七四・六〇三
シエンケンドルフ――――――――――――――二、五四七・五四九
シスモンディ――――――――――――――――――一、二〇八
ジラルダン（マダム・ド・）――――――――――――――一、一六三
シルレル――――――――――――――一、一一・一二二・一四一・二〇六・二
九七・三〇四・三〇五・三二二・三二
七・三三〇・三三一・三四五・三五一・
二、七三四・三六・四一以下・五五・五
七以下・七三・七九・八二・八四・九三・
九七・九九・一〇一・一〇二・一〇三・
一〇五・一一二・一一六・一一七・一二
五・一五一・一六九・三二八・三三一・
三六一・四一六・四八二・五二六・五四
八

シャトーブリアン――――――――一、一〇・一二・一三・一五以下・三六・
三九・四〇・五五・五八・六〇以下・九
〇・一〇七・一一二・一一四・一二五・
一二七・一三四・一三六・一四六・一五
六・一八四・一八五・一八六・一八七・
二五三・三四八・三七二・三七三・三七
六・二、五九四以下
シャミッソー――――――――――――――――――――二、二九二・三一五以下
シャリエール（マダム・ド・）――――――――一、一三〇・一三一・一三八
シャルペンティエー（ユリエ・フォン・）――――――――二、三三四
シャルンホルスト――――――――――――――――二、五四五
ジャンネット・パウリーネ（フォン・カルプ夫人）――――――二、四四
ジャン・パウル――――――一、一一・二、四〇・四四・四五・四七・
一一七以下・二九〇・二九一・五八八
シューベルト（ゴットフリード・）――二、二七・四九四以下・五二七
シュタール――――――――――――――――――――二、二八
シュタイン（フライヘヤ・フォン・）――――――――――――二、五四五
シュタイン（フラウ・フォン・）――――――――――――――二、四〇
シュタッフェルト（シャック・）――――――二、七八・四一一・六〇四
シュタゲネリウス――――――――――――――――二、六〇三
シュッツ――――――――――――――――――――二、三六
シュテッフェンス（ヘンリック・）――一、三二四・三三三・三四三・
二、一一・二四・二五・一六四・
一七六・四一二・四五一・四五
五・五〇四・六〇四
シュトラウス（ダヴィッド・）――――――――――――――二、二七
シュナイデル（ユーロジアス・）――――――――――――一、一一七
シュピールハーゲン――――――――二、一五・一六・三二・四〇九以下
シュミット（ユリアン・）――――――――――二、二〇八・五〇四
シュライエルマッヒェル――二、二三・七七・一二六・一四三・一五
〇以下・一六七・一七〇・一七九以下・
一九五以下・一九七・二五六・四一二・
四七一
ジュリー（シャトーブリアンの姉妹）――――――――一、一八
シュリヨーデル（フリードリッヒ・）――――――――――二、五八
シュレーゲル（非ルヘルム・）――一、一四二・二〇七・二〇八・二一

四・二一八・二八〇・三〇八・三一二・三一四・三四四・三四五・二一、八・六四・七一・七七・八六以下・一二四・一五〇・一五九・一六三以下・一七四・一七五・一七八・二〇八・二一四・二四五・二七八・三三七・四二五以下・五七二

シュレーゲル（フリードリッヒ・）――一、八〇・三〇九・三三五・三三七・三三八・三四二・二一、八・一三・一七・一九・二二・三六・四六・四九・六四・七〇・七四・七七・九五以下・一〇三・一一二・一一五・一二一・一二二・一二三以下・一三四以下・一四三以下・一六六・一七〇以下・一七七以下・一九七・二一二・二一六以下・二五〇以下・二五四以下・三三二以下・三三六・三四五・三五七・三五九・三六〇・四一三・四五一・四六三・四六四・五〇九・五二一・五七二・五七七・五八六・五九二

シュレーゲル（カロリーネ・）――二、八六以下・九八・一〇三・一二七・一五八・一六三以下・一七八・二四四以下・三四〇

シュレーゲル（ヨハン・エリアス・）――二、八八以下

シュレーゲル（ヨハン・アドルフ・）――二、八八以下

ショーペンハウエル――一、一一二・二、一二四

す

スヴェーデンボルグ――二、五七四

スタール夫人――一、一〇・一二・一一三・一四〇・一四一・一四二・一六九・一七三・一七四・一七八以下・二〇六以下・二三四以下・二五九以下・二九三以下・三一五以下・三五〇・三五二・三六一以下・三六七以下・三七五以下・二、四九・三二〇・五二三・五二四

スタール・ホルスタイン――一、一八〇・一九〇

スターン――二、三四

スタンダール――ペールを見よ。

スタッフェー――一、九〇

スピノーザ――一、三〇三・三二六・三六四・二、二三

スロヴッキイ――二、四七五

せ

セナンクール――一、一〇・八八以下・一一五・一二五・一五六・二五三・三四七・三七七

セルヴァンテス――二、二三八

セント・イレール（ジェッフロア・ド・）――二、五六

セント・ブウヴ――一、七三・八九・二二〇・三七七・二、一六三・二〇一・二五六

そ

ソフォクレス――一、三〇四・二、六五・六六・一〇七

た

ダーウィン（チャールス・）――一、三三九・三四〇

ダーメ・ルチフェル――シュレーゲル（カロリーネ・）を見よ。

ダヴィッド（ルイ・）――一、二九四・三一三

タチトゥス――一、二九四・三二二

タッソー――一、二五六

タヂアン夫人――一、一三九

ダルベルグ――二、五二四

タルマ――一、二九五

タレーラン――一、一八三・一九二・二二四・二、五七七・五八五・五八七

ダンテ――一、二四七・二、九八・三九五

ち

三五〇・三五二・三六一以下・三六七以下・三七五以下・二、四九・三二〇・五二三・五二四

スタール・ホルスタイン――一、一八〇・一九〇

スターン――二、三四

スタンダール――ペールを見よ。

スタッフェー――一、九〇

スピノーザ――一、三〇三・三二六・三六四・二、二三

スロヴッキイ――二、四七五

せ

セナンクール――一、一〇・八八以下・一一五・一二五・一五六・二五三・三四七・三七七

セルヴァンテス――二、二三八

セント・イレール（ジェッフロア・ド・）――二、五六

セント・ブウヴ――一、七三・八九・二二〇・三七七・二、一六三・二〇一・二五六

そ

ソフォクレス――一、三〇四・二、六五・六六・一〇七

た

ダーウィン（チャールス・）――一、三三九・三四〇

ダーメ・ルチフェル――シュレーゲル（カロリーネ・）を見よ。

ダヴィッド（ルイ・）――一、二九四・三一三

タチトゥス――一、二九四・三二二

タッソー――一、二五六

タヂアン夫人――一、一三九

ダルベルグ――二、五二四

タルマ――一、二九五

タレーラン――一、一八三・一九二・二二四・二、五七七・五八五・五八七

ダンテ――一、二四七・二、九八・三九五

チンツェンドルフ伯……二、二三・三二九

つ

ツッカティ兄弟……一、二九〇・二九一

て

ティーク（ルード井ッヒ・）……一、一一・八〇・三二八・三三二・二、七・一二・一三・一四・一七・二六・三三・七二・七四・七七・一〇四以下・一一六・一一七・一二二・一三六以下・一三八・一五五・一六七・一七〇・一七五・一九九以下・二三六以下・二七七以下・二九〇・三二九以下・三三七・三四〇・三四二・三六〇・三八六以下・四一二・四三三・四七〇以下・五二三・五三七以下・五五三・六〇三・六〇四

ティーク（彫塑家）……二、四五二

ティチアン……一、二八五・二、一一三・二四九・二五一

ディッケンス……二、三八一

ディデロー……一、一二・三六〇・三六一・二、七

テニエー……二、二六三

ティヒョー・ブラヘ……二、四二六

ディル・オイレンシュピーゲル……二、二四七

テーヌ（ヒポリット・）……一、三〇四・三二九・二、三一〇

デカルト……一、三六四

テッセー夫人……一、二二〇

デフォー……二、三七六以下

デロルム（ジョセフ・ーセント・ブウヴ）……一、一一四・二、二〇一

デューレル（アルブレヒト・）……一、三三七・二、二三九以下・三八七

と

ドウルレル……二、五九七

ドマー（ジャン・）……一、三五九

トルヴルドゼン……一、一四九・二九七・三〇五・三〇六・

三〇九・三一〇・三一一・三一二

な

ナポレオン……一、一三・二三・四九・五二・六〇・一〇九・一一八・一四〇・一四一・一六八・一八三・一八四・一八七・一八八・二〇六・二〇七・二〇九・二一一・二一六・二一九・二二一・二、四九・六一・一七四・一七九・二五〇・三二〇以下・三六七・四一四・五一五・五四七・五九三

ナルボンヌ……一、一八二

に

ニコライ（フリードリッヒ・）……一、三三一・二、三六・一〇五・一五八・五四三

ね

ネッケル……一、一四一・一七八・二四五

の

ノディエー（シャール・）……一、一〇・八九・一一五以下・三五二・三七四

ノヴーリス……一、一〇三・三三三・三四二・二、八・一二・一三・一四・一七・二二・二六・二八・七七・一三八・一四七・一六七・一七七以下・二〇二・二一一・二一三・二四六・二六三・二八九以下・三二九以下・三七八以下・四七一・四七八・五〇二・五一七・五三七・六〇三・六〇四

は

バーク（エドマント・）……二、五九八

バアデル（フランツ・フォン・）……一、三二四・二、二七・五〇三・五七三

バアレット・ブラウニング（エリザベス・）……一、二四〇

ハイベルグ……一、三三六・二、四・一二・一四・一五・

五七・二八二・二八八以下・三八二・四
二一・四二六・六〇四・四六二・五六
五以下・五九一以下
ハイネ……一、二三二・二、四二三・四三二・四五九
ハイム……二、七八
バイロン……一、一二・二二・二三・五九・六〇・八
〇・一七八・二一八・二三二・二七五・
三七六・三七八
ハインゼ(ギルヘルム・)……二、一二五・一三一
ハウフ(カルステンス・)……二、四・二一四・六〇四
パスカル……二、三四一
バスティード……一、八九
バッゲーゼン……一、三四二・二、四・二一五・四四〇
バッソウ……二、五二四
ハムマルスキョールド……二、六〇二
バラツェルヅス……二、五五五
バランシュ……一、八九
バラント……一、五三・二一三・三五〇以下・三七二
バルザック……一、五三・一六二・一六三・三七七・三七八
バルダン・ミュルレル……二、一五・五三〇
バルテレミイ……一、三〇六
ハルデンベルグ……ノヴーリスを見よ。
ハルデンベルグ(シャルロッテ・フォン・)……一、一三八・一四一・
一四二
ハルトマン……二、一七
バルムブラード……二、六〇二
ハルレル……二、二八

ひ

ヒェルレン・ビリオーヒェル……二、二六三
ビスマルク……二、三一・三二
ヒッポクラーテス……二、四一
ヒッチッヒ……二、二九八・五二二
ピラート……二、五九七
ヒューム(ダヴィッド・)……一、三六四・二、七・三一二
ビュリイ(ブラーヅ・ド・)……二、三六九

ビュルゲル……二、八九以下・九八・一〇〇・一〇三
ヒョルティ……二、二五九
ビョルネ……二、四二三・五七一

ふ

ファイト(ドロテア・)……二、一四九以下・一七〇・一七三・一七八
ファイト(フィリップ・)……二、四一三
ファウスト……二、四四三・四四四・四六二
フィヒテ……一、一一・二〇七・三二二・二、二二・二
三・二五・六七以下・九五・一〇九・一
一二・一一七・一五八以下・一六七以
下・三三一・五四五以下・五四八
フィラレーテ(アントニオ・)……一、二八六
フィリップ(ルイ・)……一、一四三
フィルドゥス(或はフィルドゥジ)……二、五七三
フーケー……二、一三七・二三二・五五三以下・六〇四
ブーシェー……一、三六
ブースマン(アウグステ・)……二、四五四
フォーゲル(ヘンリエッテ・)……二、四八〇以下・五一七以下
フォス(ヨハン・ハインリッヒ・)……二、五二四
フォルステル(ゲオルグ・)……二、一六五
ブッフール……二、四八六
フムボルト(アレキサンデル・フォン・)……二、一四八・二五六
フムボルト(ギルヘルム・フォン・)……二、一六四・五八一
ブラーム(オットー・)……二、四九八・五二〇
フリードリッヒ(デル・グローセ)……一、三一七・三五六・二、四
六・五五
フリードリッヒ(ヴィルヘルム二世)……二、三七二・五八〇
フリードリッヒ(ヴィルヘルム三世)……二、五八二
ブルーノー(ジョルダノ・)……一、三二七
プレヴォルストの女豫言者(ハウフェ)……二、二七・五〇三
プレヴォースト(ラッペ・)……一、三一
ブレンターノ……二、八・二三・二三二・二九二・二九九
以下・三四六・四一三・四三一以下・四
四六以下・四七五以下・五六六・五七
二・五七三・五七四

フローベル……二、一四〇
プロケッシュ……二、五九二
ブンツェン……二、四二六

へ

ベイル(アンリ・)……一、二六八
ヘーゲル……一、三〇四・三二七・三三六・三六〇・二、二六・三一・七六・一六七・一六八
ベーコン……一、三二七
ベートーヴェン……二、二〇九・二三五
ベーメ(ヤコブ・)……二、二六・二七・四七一・五二七
ベーメル(アウグステ・)……二、一七〇以下・三三四
ベーメル(カロリーネ・)……シュレーゲル(カロリーネ・)を見よ。
ペスタロッチ……一、三一六
ヘットネル……二、四三・六五・一九八・二〇八
ペトラルカ……二、八二
ペルグゾエーエ……二、一五・一六
ヘルツ(ヘンリエッテ・)……一、二〇七
ヘルツ(ヘンリック・)……二、四九一
ヘルデル……一、一一・三四四・二、三七以下・四七・六七・九二・一〇三・一六七・四三一
ヘルデルリン……一、三二九・二、七六以下・四三三・四四七
ベルナドット……一、一四二・二一八
ベルニニ……一、三一一
ベルンハルディ(ゾフィー・)……二、一七一

ほ

ボアスレエ(兄弟)……二、二四九以下
ボアロー(デスプリオー・)……一、五
ボードレール……一、一〇二
ボーハルネー(マダム・)……一、一三九
ボーブ……二、三七七
ボーマルシェー(フィガール・)……二、五四五
ホストルップ……二、一四
ボッカチオ……二、一一三
ホップス……一、三六四

ホッフマン……二、八・一四・一七・一八・七四・二〇四以下・二二五以下・二六二・二八二・二八七・二九二以下・三一六・三二二以下・五二〇・六〇四
ボナール……一、三七二・五九七
ボナパルト……ナポレオンを見よ。
ホメール……一、四八・五二・五三・一八五・二二五四・二八四・三〇五
ホルベルグ……二、八八・一〇四・二七四・三五八
ボルマン……一、一八二
ホルン(フランツ・)……二、四二三以下

み

マイル(クリスチアン・)……二、五二四以下
マザラン……一、三五三
マブリー(アッベ・ド・)……一、三五六
マリー・アントアネット……一、一八二
マリヴォー……一、三二・三三

み

ミオルレル(バウル・)……二、二四六・四二二
ミケランジェロ……一、二七九・二八二・二八三・二九一・二、二五一
ミラボー……二、三六八
ミュッセー(アルフレッド・ド・)……一、八七
ミュルレル(アダム・)……二、二八・二五五・四九六・五〇三・五〇九以下・五一七・五一八・五八六・五八九以下・五九三以下
ミュルレル(ヨハン・フォン・)……二、五八四以下

む

ムニオッホ……二、五二三
ムンヒ(アンドレアス・)……二、六〇三

め

メートル(ジョセフ・ド・)……一、一三六・三七二・二、二〇以下・

三六一・五三六・五七四・五九七以下
メッテルニッヒ――――――――――二、五一〇・五八三・五八五・五九四
メリメー――――――――――一、三三七・二、四八〇・五四一
メロオ（ゾフィー・）――――――――――二、四五二以下・四五七
メンデルスゾーン（モーゼス・）――――一、三二六・二、一四九・一五六

も

モーエ――――――――――二、六〇三
モーシェロッシェ（ヨハン・）――――――――――二、四四四
モツァルト――――――――――一、三四六・二、二二五
モハメッド――――――――――二、九六
モリエール――――――――――一、六七・二三五・三四四・三五六・二、五〇六以下・五四五
モンタラムベール――――――――――二、五七六
モンテスキュー――――――――――一、三五八以下・三六六
モンモランシー――――――――――一、一八〇・一八九・二一四

や

ヤング――――――――――二、三四

ゆ

ユーゴー（ヴィクトル・）――――一、八九・二三二・三四四・三七二・三七六・三九七
ユスト――――――――――二、三三六
ユング・スティルリング――――――――――二、三四五

よ

ヨゼフ二世――――――――――二、四六

ら

ラーエル・ヴァルンハーゲン――――二、一四八以下・五八五・五八七・五九二
ラーベック――――――――――一、五一
ライプニッツ――――――――――一、三六四
ラインホールド――――――――――二、三三一
ラシーヌ――――――――――一、二一四・二九五・三〇六・三〇七・三三〇・三四四・二、六三
ラッブ――――――――――一、八九
ラッサール（フェルディナンド・）――――――――――二、四二三
ラマルティーヌ――――――――――一、三三六・三七二
ラムネー――――――――――一、一三六・三七二・二、五九七
ラムバッハ――――――――――二、一〇五
ラ・ロッシェ（ゾフィー・フォン・）――――――――――二、四七・四五一
ラ・ローシュフーコー――――――――――二、三三四
ラファエル――――――――――一、二九一・二、一一三・一九九・二五一
ラフォンテーヌ（アウグスト・）――――――――――一、五一・二、五八
ランドスタッド――――――――――二、六〇三
ランクレット――――――――――一、三六

り

リチャードソン――――――――――一、三一・三五三・三五四・二、一〇八
リッヒヤルト――――――――――二、一五
リュッケルト――――――――――二、二〇一以下

る

ルイーゼ（誓誓西の女王）――――――――――二、三七二
ルイ・フェルディナンド皇子――――――――――二、一四八
ルイ十三世――――――――――一、三五
ルイ十四世――――――――――一、三二・三五・三一二・三一三・三三一・三四五・三五四・三五五・三五六・二、五〇七
ルイ十五世――――――――――一、三六・六二・二六五・三五四
ルイ十六世――――――――――一、一九・二二
ルーゲ（アルノールド・）――――二、二八・二一九以下・三四〇・三四三・五三六・五四五
ルーテル――――――――――二、三五・九六・三一一・四四二・五三二以下・五七六
ルーベンス――――――――――一、三七
ルソー――――――――――一、一一・一二・一三・二〇・二一・三一以下・四二・五二・五三・五四・六〇・六一・八六・八九・一〇七・一一四・一一

五・一二一・一二八・一四五・一四九・一七九・一八一・一八九・一九四・二二七・二五三・三六一以下・三七一・三七二・三七六・二一、七・三四・一三〇・一四二・一五二・一八〇・一九〇・二五六・二五八・三六八

ルナン（エルネスト・）――――――――――――――――――――一、一二

れ

レヴィン（ラーエル・）――――――――――――――――ラーエルを見よ。
レオ――――――――――――――――――――――――二一、二八
レオナルド・ダ・ヴィンチ――――――一、三二七・二一、一六四・二三七
レカミエー夫人――――――――――――――一、一四三・二一一四
レッシング――――――一、一三五・一三六・二九五・二九七・三〇八・三一二・三二六・三二七・三三一・三四四・二一、七・三四以下・三七・八九・一〇二・二七八・三二八・三三三・五三八

レティーフ・ド・ラ・ブレトンヌ――――――――――――――二一、一〇七
レニー（ギド・）――――――――――――――――――一、二八五
レルモントフ――――――――――――――――――一、八一
レンブラント――――――――――――――――一、二三九・二九二

ろ

ロアイエー・コラール――――――――――――――――二一、五九五
ローベルト（レオポルド・）――――――――――――――二一、二三八
ローラン夫人――――――――――――――――一、二九四
ロッカ（アルベルド・ド・）――――――――――一、二一七・二一八
ロック（ジョン・）――――――――――――――――一、三六四
ロベスピール――――――一、一二・一八三・一八八・二一、一七〇

わ

ワグネル（リヒヤルド・）――――――――――――――――二一、三二
ワッケンローデル――――――二一、七四・七七・七九・一九八・以下・二三六以下・二六〇以下
ワット――――――――――――――――――――一、三六

大正四年五月十二日印刷
大正四年五月十五日發行

定價
金三圓五十錢

譯者　大吹田順、大助
發行兼印刷者　東京市日本橋區大傳馬町二丁目　內田淺

發行所　東京市日本橋區大傳馬町二丁目　內田老鶴圃
電話浅花一三三番
振替東京一二一四六番

（澤英舍印刷）

版權所有

外450
福う

~~328~~ 902
~~37X~~ B71
(1)

終